









- グローバルモデルが示す最適経路
- 京都議定書の意義 排出削減目標、柔軟性措置
- ・ 途上国の参加
- 技術の役割 省エネ、天然ガス、自然エネルギー、原子力 CO<sub>2</sub>回収・貯留



## Simulation cases

	Case	CO2 constraints
1	BAU	free
2	550ppm	Global atmospheric CO2 concentration
		at 550ppm in 2100
3	COP3 forever	COP3 forever in Annex1 after 2010
4	300%	2010: COP3
		after 2020:
		Annex1:80% CO2 emissions at 1990
		non-Annex1: 300% CO2 emissions at 1990







































## 政策的含意

- ・地球温暖化対策という外部性を考慮しないと、原子力には市場競争力 がない。
- ・大気中CO2濃度安定化という地球温暖化対策の究極目標を考慮する と、21世紀後半には原子力の大幅な拡大が望まれる。
- ・21世紀中の天然ウラン資源の利用可能量が現在の既知資源の3倍 程度だとすると、地球温暖化対策のため、FBRによるPuの本格的利 用が21世紀後半に必要になる。
- ・CO<sub>2</sub>削減規制の不確実性を考慮すると、当面は使用済み燃料の中間 貯蔵を選択し将来に備えて再処理と使用済み燃料直接処分の両 方の選択肢を確保する必要がある。